

アメリカにおける大学開放の動向

——「生涯学習」の観点から——⁽¹⁾

清水 一彦

(筑波大学研究生)

はじめに

近年、成人の学習する必要性や要求が高まる中で、とくに生涯教育の観点から、学習要求をもつすべての成人に対していつでも、どこでも学ぶことができるような学習機会の保障が強く求められてきている。

生涯教育の観点から成人の学習機会を保障するという生涯教育施策については、これまで少なくとも二つの方向性が指摘されている。一つは、生涯教育行政の統合化、生涯にわたる教育機会の統合化あるいはシステム化といったインテグレーションの方向である。他の一つは、大学をはじめとする学校教育の成人への開放というオープン化の方向である。⁽²⁾

本稿では、成人の生涯にわたる学習機会を保障するものとして考えられるこれら二つの方向のうち、後者のオープン化、とくに大学を中心とする高等教育機関の成人への開放の問題に焦点を当てる。

すでにわが国においても、先に中央教育審議会の「生涯教育に関する小委員会」が、生涯教育の観点から現行教育を見直し、学歴社会打破をめざして成人への大学開放などを提言したことは記憶に新しい。この提言の中にもみられるように、オープン化に関しては、大学開放はどのような視点からとらえ、またその具体的な制度的保障としてどのような方法が考えられるのか、を明確にすることがさしあたっての緊急な課題となっている。

本稿の目的は、アメリカにおける大学開放に関する改革事例を取り上げ、その動向を探るとともに、上記の課題に応える一つの緒をみつけようとするものである。

ところで、アメリカにおいては、成人への大学開放は主としてそれぞれの大学の「大学拡張活動」⁽³⁾(University Extension Work)によって行われてきた。この大学拡張活動が大学の範囲を拡張するという今日の形として発達し始めるのが、およそ1920年頃であり、さらに全国的な関心と規模において急速に発展するのは、第二次世界大戦後とくに1960年に入ってからである。そして、今日に至るまでの間、大学開放をめぐる改革は、約言すれば成人の高等教育機会の拡充の過程であり、高等教育機関をいかに学習者である成人(若者も含む)の生活場面に適合させるかが重要な問題とされてきている。

アメリカにおける大学開放の改革は、その重点の違いによって大別すると、およそ次の二つの動向として把握することができるであろう。一つは、主に教育内容・方法上の改革であり、他の一つは、既存の教育プログラム(educational program)をより受け入れやすくするためのメカニズムを工夫する動きである。これを成人と大学との関係でみた場合、前者は成人の教育プログラムへの接近であり、後者は成人の教育機関への接近であるといえる。それゆえ、大学開放の改革は、前者については教育プログラムの柔軟性が、後者については大学開放の時間的、場所的、施設・設備及び経費の面の保障が具体的な問題となるであろう。

以上のような点に注目しながら、以下とりわけ1960年代以降の大学開放に関する典型的な事例として、それぞれ、前者についてはFree University, University Without Walls, Open University を、後者についてはWeekend Collegeを取り上げながら主題に迫る。

1 新しい教育プログラムと大学拡張運動

(一) Free University

1960年代以降のアメリカの大学における成人教育の発達は、伝統的な高等教育への挑戦として始められた。即ち、人種的マイノリティ、女性、他の不遇者集団による社会的不平等の解消を願う抗議運動と、人間相互関係や個々の人格発達、自信回復といった人間性回復をめざす解放運動とに支えられながら、既存の大学のとくに伝統的な教育内容を批判する新しい成人教育プログラムが、全国各地で登場するようになったのである。その中心的なものが Free University であった。

最初の Free University は、1966年カリフォルニア州立大学のバークレー校に設立された。その設立意図は、次の叙述に明確に表されている。

「Free University は、約束と抗議を意味する。それは、我々の知的関心に新しい焦点を約束する。それは、高慢な皮肉を生み、熱中とか正直さを受け容れない『教育機関』⁽⁵⁾を排絶する。」

このように Free University は、従来の高等教育機関及びその教育のエリート主義、孤独主義、記憶主義、個人主義を厳しく非難すると同時に、それに代わる人間的学習、行動的思考、学習者のコミュニティを新しい目的として設立されたのである。

一般の学生、ドロップアウト者及び成人を対象とした Free University は、大学のフォーマルなカリキュラムに代わるものとして、多様な教育経験を与えようとした。例えばコースの中には、インドシナについての学問的講義、科学や工学、黒人の歴史の他に、思考上の諸経験(experiences in meditation)、国内自動車旅行や園芸 (organic gardening)、等の広範囲にわたる多種多様なものが設けられた。これらの各コースは、大学教授をはじめ学生や経験豊富な職人、法律家あるいは地域の警察官によってさえも教えられていた。し

かも、誰でも自分が欲するものをどんな形でも教えることができ、また教師が確保できない場合は、集団で集まって学習の仕方を学ぶ。そして、学生はそれぞれの立場で、それぞれの受講するコースで学習の成果を判断するのである。

Free University は、1960年代末には、全国のほぼ半数の伝統的大学においてみられるようになった。共通した特徴点は、学生たちの目標と関心に基本的焦点があり、完全なオープン・アドミッション制であり、単位認定や資格取得はなく、学生と教師の間は比較的平等主義的關係であり、クラス学習もあらゆる種類の野外経験 (field experiences) と結びつけることを強調している点である。また、「Free」は「無償」ではなく教育プロセスの最大限の「自由」を意味している。Free University のもつ自由な雰囲気は、次のように象徴的に表現されている。

「人々は競争的な関係よりも、新しい世界、開かれた社会、協力的、共有的関係を求めに Free University にやって来る。彼らはまた、分析したり討論したりすると同様に諸技術を学びにやって来る。パークレーの Free University は、似たような要求をもつ人々が集まる小駅であり、公園のベンチである。要求が満たされれば (恐らく満たされないだろうが)、人々は『去る』のである。⁽⁶⁾」

学歴資格とは関係がないにもかかわらず、Free University には、何百という学生、大規模な大学では何千という多くの学生が入学し続けているという。まさにそれは、「学生が自らの学習や社会的理解に身を委ねる感動的なデモンストレーション⁽⁷⁾」であった。Free University は、「伝統的高等教育を揺り動かす (戦後) 第二の告発⁽⁸⁾」として、単に一時的な現象として終わることなく、それ自身の発達とともに他の多くの改革努力を生じさせたのである。

(二) University Without Walls

既存の高等教育機関に対し、新しい形態と内容をもって誕生したのが、

University Without Walls である。これは、急速に変化する社会の中で、教育の改善を最も効果的な方法で行う実験と研究を進めることに関心をもつ25の大学の協会によって、1971年フォード財団の援助を受けながら、オハイオ州のアンティオーク・カレッジにその行政上の基盤をもって設立されたものである。

University Without Walls は、因襲的な大学のプログラムからドロップアウトした者や、フルタイムの仕事に従事しているために、正規の大学に行けなかった成人学習者を対象としている。そして、若者と同様に年長者をも集め、「若者と年長者との間の新しい対話と信頼を築き上げる」⁽⁹⁾ことをねらいの一つとした。事実、翌年の最初の報告によれば、3000人の学生が集まったが、年齢は16歳から73歳にまで及んでいたのである。

入学の方法は、各地域の機関の判断に任せられ、コースに応じてかなり高度の選抜を行うところやオープン・アドミッション制をとるところもあった。また入学者の中には、黒人、プエルト・リコ人、シカノなどの人種的マイノリティも含まれていた。

University Without Walls は、学習者の要求を満たすためにさまざまな学習認定、資格認定のコースやカリキュラムを設定している。しかも、それぞれのコースは個別化され、正規の授業、野外経験、実習、見学、独立学習、集団プロジェクトなどから編成されている。これらの学習プログラムは、学生と個々の助言者 (advisor) が「学習者一促進者」(learner-facilitators) と呼ばれながら、教授＝学習指導を行っているのである。また、コミュニティ資源の利用も促進され、必要な知識や技能が求められる時には、補助として大学教授が指名される。さらに、学生はこのプログラムに参加しているどの大学でもコースを自由に選択することができるようになっている。固定化されたカリキュラムや時間的制限もなく、学生の自由な学習計画に基づいて単位や資格の取得ができる点は、最も特徴的な点であるといえる。

このように University Without Walls は、文字通り従来の大学の壁を取り払うと同時に、年齢による壁や教師と学習者との壁をも取り除くものであ

た。それは、大学のキャンパスを廃止し、「もはや大学解体運動というに近⁹⁰⁾いものである」といっても決して過言ではないのである。

(三) Open University

成人の学習要求の高度化に応ずるために、成人に対する学位プログラムを制度化しようとする動きが、Open University と一般に呼ばれるものである。カリフォルニア州立大学のそれは、とくに Extended University と呼ばれ、これはイギリスでの成功に刺激されて、成人にパッチャー号やマスター号をパートタイムで、しかもキャンパス外で与えようとするものである。

カリフォルニア州立大学当局は、新しいプログラムは既存の大学の学位プログラムと統合した形で確立されることを勧告したのである。この勧告に基づいて、それぞれのキャンパスの教授団は基準を作成し、カリキュラムを開発し、教育指導に当たる仕事を割り当てられた。また、州の教授団会議においてもそれは支持され、「名称」においても「質」においても従来の大学におけるものと平等である学位プログラムを発達させることが勧告されたのである。

この Extended University は、不運にも州の財政難によりその実施が延期されているが、成人の外部学位プログラムについては、他の州立大学において、すでにこれまでさまざまな形で実践されている。こうした動きは、アメリカ高等教育の発展に多大な影響を及ぼしている民間諸団体の提案や勧告によっても促進されているのである。例えば、「カーネギー 高等教育委員会 (Carnegie Commission on Higher Education)」は、成人に対するパートタイムの外部学位プログラムについて次のように提案している。

「大学生が学位取得あるいは学位取得のために主要な学問領域を修了できる道は、今や仕事上のスケジュール、地理的位置、家庭内での責務のためにそれが利用できない人々に対しても拡大され、高等教育への接近が図られねばなら⁹¹⁾ない。」

同委員会は、また成人の外部学位プログラムは、現在の正規の学生にとっ

でも有益であることを示唆した。というのは、彼らは現在のフルタイムの学習に集中するよりも、もっと有効に学習と労働とを結びつけることができるからであるという。また、このプランの確立は、コミュニティ・カレッジの2年間で修了した者があと2年のパートタイムで学位取得できることをも含むものであり、単位認定の互換性を可能にするものとして注目される。

また「アメリカ教育協議会」(American Council on Education)も、高等教育への成人入学者の急増を予測しながら、成人教育の重要性とともに、暗に外部学位プログラムの確立の必要性を示唆するのである。即ち、既存の大学は、増加しつつある成人の「顧客」の要求を満たすために、その構造を変革し、新しいカリキュラムを開発し、より適切な財政をもって、今まで以上に、成人教育の分野に多大な注意を払わなければならないとする¹⁴。

今日、アメリカにおいても、資格や証明は就職や昇任への能力の主要な指標となっている。これが続く限り、伝統的な高等教育機関は、成人に対する学習機会、学歴資格の取得の場を提供するという問題を常に抱えるであろう。この問題に答えるものとして、大学学部、大学院レベルを成人に開放するパートタイムの外部学位プログラムは、成人の学習要求の高度化に伴って、ますます重要視されることは疑いない。

以上の三つの代表的改革事例は、いずれも主に新しい教育プログラムを中心とした内的改革であり、それによって成人の学習要求を満たそうとするものである。資格取得という点において、Free Universityは、他の二つの事例とは違って、単位や学位取得の場とはなっていない。しかし、それはUniversity Without Wallsとともに、かなり「自由な雰囲気」の中で学習の機会を確保しようとしている点は、共通する特徴点である。また、University Without WallsやOpen Universityがその教育プログラムの柔軟性とともに、既存の大学の新しい構造変革をも試行している点は注目しなければならない。

2 Weekend College の発達とその意義

(一) Weekend College⁰³⁾

1965年のフロリダ州のマイアミ・デード・ジュニアカレッジを皮切りに、その後各地でみられるようになった Weekend College は、大学開放に一つの方向を与える画期的な試みとして注目される。中でも、1971年に22のコースと241人の学生を集めて始められたニューヨーク州のロング・アイランド大学の C. W. Post Center での試みは、多くの反響を呼んだのである。数年後には、それは2,500人を超える入学者をもつに至り、しかも大学及び大学院レベルでの五つの学位プログラムと、各学期ごとに160を超えるコースが設けられるようになった。

Weekend College は、その名前が示すように土曜日と日曜日の週末授業を計画したものである。新しい学習者は、ウィークデーの間、昼夜ともに大学へ行くことが不可能であったり不都合であったりする広範囲の人々を含んでいる。具体的には、ベビーシッターのいない主婦、昼間のハードな労働を経験する工場労働者、商業人、現場教師、キャンパスから遠隔地にいる人、再学習の必要性を感じている人、人格教養や専門的成長を求めるカレッジ卒業生、及び永続的な余暇時間をより生産的に使うことを求める人々である。こうした成人の目標集団に加えて、Weekend College は学問的に特別な才能をもつハイスクールのシニア学年の生徒に対して、教育経験を豊富にしたり、またハイスクール在学中でカレッジ学習を始めたいと望む生徒に対して、追加の授業選択の機会を提供する。さらに、正規のカレッジ学生集団のメンバーをも対象にしており、学位のための学習を促進したいと望んでいる大学生に対する学位プログラム教育をも提供するのである。

Weekend College は、主に成人学習者に対して、彼らの最も都合のよい時間と場所をもって高等教育を利用できることを目的として発達した。具体的

な時間についても、簡単な質問紙によって彼らがどんな授業を望んでいるかを調査し、一定の人員さえ確保されれば、それは容易に開設される。既存の高等教育機関の施設・設備も、教授＝学習指導がウィークエンドに行われるため、能率よく効果的に利用できるのである。

学位プログラムに関する利点も認められている。それはキャンパス内でも既存の知的・物的資源を最大限に利用しながら取得できることである。例えば、看護におけるB.S.学位は、州の公認看護婦が実際に仕事をしながら土曜、日曜の学習によって取得可能となっている。そして、このプログラムに必要な実践的経験は、通常ウィークエンドには眠っている臨床設備の利用を通して提供されるのである。また健康管理行政や刑事法における専門学位(Master of Professional Studies)、さらに自由教養プログラムとしての人文研究や一般教養における専門学位(Associate in Arts)についても、病院関係者、地方の弁護士や裁判官、コミュニティの十分な資源が、この時間帯には最もよく利用できるのである。

Weekend College に入学する学習者はすべて、彼らの目標や要望について尋ねられ、その結果は当機関のプランナーに、学生の興味・関心のタイプ分けや将来の学問的プログラムを作成する上で利用される。さらに機関は、教育ニーズを開発するために最も適当な専門的協会、公機関、協同体、各種の組織等と接触し連携しながら、既存の学位プログラムを発達させ、新しいプログラム開発の基礎を築く努力をするのである。したがって、この過程においては、機関の情報機能がとくに重視され、活発になるのである。そして、それは Weekend College の継続的発展に大いに貢献するものとなっている。

Weekend College の教育プログラムは、さらに柔軟なスケジュールによって成人の学習要求を満たしている。学生は、6～8週間で大学あるいは大学院レベルにおける6単位の学習認定を受けることができる。スケジュールには三つのタイプがある。それは、連続6週の土曜日に各6時間の授業と、連続6週の日曜日に各6時間の授業、及び隔週の各土曜日あるいは日曜日にそれぞれ8時間ずつの集中授業である。いずれのスケジュールにおいても、学

生は3単位のコースを修了することができるのである。

学習形態については、伝統的なクラス授業や独立学習の他に、学生は教師との個別的コンサルタントの機会をもつのである。即ち、Weekend Collegeでは、そのプログラムの成功のために、コンサルタント機能が重視され、絶えず特別に設けられた教師との接触の機会やテレフォン・コンタクトが、すべての学習者にゆきわたっているのである。また、図書館や他の補助的サービスも適宜利用され、それに慣れ親しむための特別見学も用意される。オリエンテーションも重要な機能の一つで、図書館をはじめ教科書、クラス等の案内書も事前に配布され、より効果的な授業運営が図られている。

その他、とくに成人学習者に対しては、特別の配慮がなされている。まず、子どもをもつ親の場合、彼らがウィークエンドの授業に出席している間、その子どもに対しても貴重な教育経験を提供するのである。即ち、ロング・アイランドの一私立学校において、創作的教育プログラムを学習する機会が与えられている。そこでは、音楽、ダンス、絵画、水彩画、陶器、建築、彫刻、演劇等のさまざまなプログラムが用意されているのである。また、夫婦揃って共に学習することを促進するために、配偶者に対する授業料割引制度をも採用している。このように、Weekend Collegeでは、夫・妻・子どものすべての家族に、同時に教育事業に参加できるシステムをとっているのである。授業料納入に関しても、その簡素化、容易さが図られクレジット・カードの利用を認めている。大多数の成人は、それを利用することによって彼らの家計に応じていつでも授業料を支払うことができるようになっていく。

Weekend Collegeの教授陣は、正規のフルタイムの大学教授が主体となっている。それゆえ、そのプログラムは彼らを通じて正規の大学と統合され、学問的安定性が確保されるのである。そして同時に、Weekend Collegeの学問的地位も、絶えず同一の教授によって伝統的な大学の学問的経験と比較されながら、その質的維持・向上が図られようとしている。教授、学生、行政者及びコミュニティのすべての人々がそのプログラムを誇り高きものと考え

る所以は、まさにこの点にあるといつてよい。

(二) 成人の学習機会の保障からみた Weekend College の意義

Weekend College は、もともと教育の内容・方法に重点をおいた改革ではなく、既存の教育プログラムをより受け入れやすくするためのメカニズムを工夫する改革であった。多種多様な非伝統的教育プログラムや高度な学位プログラム、さらには柔軟な学習方法やスケジュール等は、この改革の過程で発達してきたものであると考えることができる。

時間と場所の両側面から Weekend College を成立させ、大学における成人教育を急速に発達させたことは画期的なことであった。とくに大学の知的・物的資源を最大限に活用する点は注目しなければならない。このことは、大学の壁の外での教育拡張活動に対し、大学の壁の中への教育拡張活動とみることができる。したがって、大学と社会との関係から言い換えるならば、それは従来の大学の社会への拡張から、社会の大学への拡張をめざすものであったといえるであろう。勿論、大学に在学中の学生やハイスクール在学中の生徒の学習の場でもあることから、それは大学内部への拡張でもあり学校教育への拡張といつてもよい。

しかしながら、Weekend College は、決して正規の伝統的學生、伝統的な高等教育観の存在を否定するものではない。むしろ、既存の大学に、伝統的な高等教育の形態を中心として、その中に新しい Weekend College の形態を併存させ、新しい大学像の創造をめざす一方途としての改革であったととらえることができる。別な表現をすれば、それは大学の構造の柔軟化であり、従来の硬直した構造を変える新しい構造変革であるといえよう。そして、それは成人学習者を大学へ接近させるという受動的なものでなく、もっと積極的に在学中の生徒・學生を含めたすべての者に、その学習機会を保障する大学の「学習社会」の実現化を志向する一つのあらわれともみることができるのである。

成人の学習機会の保障を、単に当事者自身だけでなく、家族の構成員や家

計への考慮という点から推し進めていることも、Weekend College の最も注目すべき点の一つである。これまで、学習要求をもちながらも子どもや経済的な関係でその学習機会を奪われていた人々や、奪われないまでも学習要求を十分に満たすことができなかった人々も多くいたであろう。しかしながら、子ども自身にも同時に学習の場が与えられ、また経費面での優遇措置によって、彼らの学習機会は回復され、さらに一段と容易になったのである。そればかりか、それまで学習要求をもたなかった人々にもそれをもたせるような積極的な意味をもっているのである。

楽観的な見方であるかもしれないが、Weekend College の設立及びその急速な発達の中には、若者を含むすべての成人に対し、少なくとも時間的、場所的、知的、物的資源及び経費の側面における学習機会の保障が着実に実現されつつある。ニューヨーク・タイムズ紙がこの Weekend College を評して、「現在この機関に在学している大学生の何人かは、後に彼らの大学時代を振り返った時、唯一心に残っているのは土曜日と日曜日であろう⁰⁴」と誇張しているが、それはあながち見当はずれでないかも知れない。それだけ、この Weekend College は、今後のアメリカの大学開放の方向を示唆するばかりでなく、新しい大学の姿として広く国民の中に定着する可能性を秘めているのである。

3 大学開放の課題と展望—「生涯学習」に向けて

(一) 高等教育機能の拡大と成人の学習要求の多様化

アメリカにおける大学開放は、これまで取り上げた改革事例に代表されるように、その大学拡張活動の発展を通して、主に成人のパートタイム学習者のために、彼らの学習機会の拡充を図ってきている。それは、一つは組織的かつ継続的な教育プログラムの提供であり、一つはその教育プログラムを受け入れやすくするためのいわば外的条件整備の方向であった。

ところで、一方ではまた、大学の正規のフルタイムの課程を成人に開放する動きも、多くの大学においてみられる。コロンビア大学が一般教育部において地域住民に大学教育を開放しているのは、その好例である。一般に、アメリカの大学では社会人を正規の学生として入学させており、この中にはハイスクール卒業後職業に従事したのち進学する者、入学後中途休学し一定期間何らかの社会活動を経験して再入学するストップ・アウト者も含まれている。¹⁰⁹

したがって、成人に対する大学開放の問題を考える場合、一つは大学自体の機能変化と、一つは成人の要求の多様化を問題にする必要がある。

アメリカの大学は、1957年のいわゆるスプートニク・ショックを直接的契機に、それ以後の一連の高等教育改革によってそれ自身の目的や機能を大きく転換することになった。

そこでは、教育内容の多様化とともに、単に知的エリートだけでなくすべての学生に対する教育機会の拡大・開放によって、多様な要求をもつ学生の増加をみた。大学自ら、それまでの教育の機会均等から除外していた集団に対する責任を自覚し、人種的マイノリティや女性をはじめ、その拡張活動の充実や定員増によって成人やパートタイム学生、あるいはオープン・アドミッション制を通して学力の低い生徒をも抱えることになったのである。そして、もはや大学はユニバーシティからマルチパーシティへと変貌しつつあり、従来の「高等教育」の概念に代わる新しい「中等後教育」(post-secondary education) の考え方が強調されるに至っているのである。

「新しい顧客」(new clientele) としての学生集団は、その能力・関心・目標において、過去の高等教育における学生とは著しい違いをもっている。とりわけ、成人については、職業的、キャリア的訓練、レクリエーションや余暇活動に含まれる分野、それに伝統的教育分野にわたる学習を要求している。そして、彼らの挑戦は、学習要求の多様化に伴う教授方法(クラス授業、実習、協働教育、職業訓練、野外経験、独立学習等)と、学習要求の高度化に伴う資格取得(単位認定、学位取得等)の問題に中心がおかれてきている。

従来の大学における「伝統的學生」に対し、「非伝統的學生」と呼ばれる新しい学習者としての成人パワーの出現によって、今日のアメリカ高等教育は、「新しい学習者を伝統的學習者に変えていくのではなく、伝統的教育をすべての者に提供する新しい教育に改めていく⁰⁹」という挑戦を受けているのである。この「新しい教育」こそ、平等主義の理念に支えられた「中等後教育」の下における「生涯学習」の実現を意味している。

(二) 非伝統的教育の発展と「生涯学習」

伝統的學生の構成する伝統的大学が、非伝統的學生を含むことによって、アメリカ高等教育は今や新しいシステムへ変化することが求められている。それは、「中等後教育」の再編成であり、アメリカ社会を構成するすべての者に対する広い意味での高等教育の開放という力強い、しかも全く新しい動きなのである。

この大きな問題に最も積極的に取り組んでいるのが、カーネギー高等教育委員会である。まず、この委員会は、1970年に「より少ない時間で、より多くの選択を」(Less Time, More Options)と題する報告書を刊行した。その中で、教育の重複をなくし、ハイスクールと大学における学習者の時間の無駄をなくすことを強調している。そして翌年には、同委員会は「大学入学試験委員会」(CEEB)と「教育テスト・サービス」(ETS)の共同事業による「非伝統的學習委員会」(Commission on Non-Traditional Study)を設立した。その設立目的は、「現在進行しているあるいは計画されている(外部学位を含む)非伝統的中等後教育のあらゆる側面を開発し、調査すること⁰⁹」であった。グッド(Samuel B. Gould)を議長とするこの委員会は、最初の刊行書「学習者のための新しい次元」(New Dimensions for the Learner)の中で、とくにアーティキュレーションの重要性を説いたのである。

「我々は、非伝統的教育に従事している人々やその教育計画に当たる諸機関に、全般的なコミュニケーションの欠落とそのための努力の重複を見る。さらに、現在個々人のために存在する学習の機会を、容易に確認する

(identifiable) ことができず、また学習者に情報を伝達する組織的方法も十分ではない。⁰⁹

ここで強調されるアーティキュレーションとしてのコミュニケーション・システムの確立は、「中等後教育」がさまざまな「顧客」を有しているだけに、伝統的教育におけるよりも、より一層重要なものとなってくるのである。

一方、クロス (K. Patricia Cross) とジョーンズ (J. Quentin Jones) は、非伝統的教育は学習者が伝統的教育において通常出会ういくつかの障害と戦わなければならないとして、次の五つの障害を挙げている。⁰⁹

(1) クラス入学

主に農村地域における一千万以上の人々は、伝統的な自由な入学の教育機会から遠ざかっている。伝統的クラスに入学できない他の集団のカテゴリーは、若い母親、身体障害者、及び入獄者たちである。

(2) 単位累積加算 (credit accumulation) 制度の欠如

しばしば家族を移動しなければならない商業人やその妻は、その移動によって不利な立場にいる。

(3) スケジュール上の障害

仕事に従事している人や結婚している女性にとっては、自分の責務と教育活動とを結びつける際スケジュール上の衝突がしばしば起こる。

(4) 経済的障害

パートタイムの成人学習者は、多くの機関における経済的援助を受ける際不利な立場にあり、そのため自由なスケジュールの機会が奪われる。

(5) 限定された教育の定義 (definitions)

かなり有能で創造性に富む若者の大多数は、伝統的な大学プログラムの価値や目標を受け容れない。また一方では、いかなるプログラムにおいても必ずや成功する能力をもっていたとしても、普通学校 (Common school) にいるため継続高等教育を受けることができない者もいる。

これらはいずれも、すべての者の学習機会を保障する上で重要な側面であ

る。と同時に、こうした障害がすべて取り除かれて初めて、非伝統的教育の発展の基礎が築かれることになるといえるであろう。

すでに、非伝統的教育については、いくつかの教育機関や全国組織、民間諸団体の勧告や提案に促進され、また巨大な財団の援助を受けながら、とくにニューヨーク州、カリフォルニア州を中心に、各大学で継続的な実験と研究が進められているのである。本稿で取り上げた改革事例は、こうした実験と研究の結果行われた実際の改革である。とくに、Weekend College については、クロスやジョーンズが挙げた障害のいくつかを現実克服しようとしている。この意味でも、Weekend College は、非伝統的教育の発展のための一つの典型的なモデルとして考えられるのである。

非伝統的教育の発展は、近い将来、アメリカの「新しい教育」として「生涯学習」時代の到来を約束するものでもあるといってよい。

おわりに

以上のように、少なくとも1960年代以降のアメリカの大学開放に関する改革事例には、個々人に対する教育に重点をおく内的改革と、すべての者に対する教育の保障を目的とした外的改革という二つの明確な動向が認められる。そして、前者は伝統的高等教育の内容に代わる非伝統的なさまざまな新しい学習プログラムや、成人の学習要求の高度化に伴う外部学位プログラムを発達させた。これに対し後者は、Weekend College に代表されるように、学習の対象の拡大を図るとともに、その学習機会の制度的保障をする新しい方策を生み出した。いずれの場合においても、共通していえることは、学習者中心の改革を志向しており、地域社会との関係を強調し、その知的、物的資源を有効に利用しようとしている点である。

こうした大学拡張活動の急速な発展は、教育内容の多様化や非伝統的学生の増加等による大学の「マルチバーシティ化」とともに、高まる成人の生涯にわたる学習要求に促されながら、新しく「中等後教育」という概念の下で

「生涯学習」の実現を要請するようになった。そして、この「生涯学習」の実現に向かって「中等後教育」としての大学が成人の生涯にわたる学習の要求を徐々に満たしつつある中で、アメリカにおける大学開放の問題はまた新たな段階を迎えようとしているのである。即ち、単に伝統的^①な大学を成人に開放するという大学拡張の段階から、今や「中等後教育」の再編成の中で、すべての学習者の「学習社会の場」をめざした大学構造の柔軟化、弾力化という大学構造変革の段階に来ているといえる。そこでは「中等後教育」の非伝統的教育の充実・発展が強調され、中でもアーティキュレーションの重要性が求められてきているのである。

すでに述べたように、非伝統的教育の発展ということからみれば、Weekend College は、今日のアメリカにおいて、最も典型的な最も注目すべき改革事例であるといえる。勿論、それはまだ発達の初期の段階にあり、全国各地で見られるには至っていない。また、クロスやジョーンズが挙げた非伝統的教育が克服すべき障害のうち、とくにクラス入学や単位累積加算の側面における保障の問題は残されている。しかしながら、Weekend College の改革志向の中には、将来のアメリカ教育の新しい姿をもかいま見ることができるのである。それは、大学だけでなく学校教育を含めた現在の全学校制度を根本的に改め、すべての者にその生涯を通じて学習の機会が設けられている「生涯学習体系」の姿である。とくにまた、大学がハイスクール在学中の学習の場でもあることから「中等後教育」という概念すらなくなるのではないだろうか。

少なくとも、今日のアメリカにおいては、すべての成人に対して、いつでも、どこでも学ぶことができる学習機会を保障する、中等後段階の「生涯学習」については、単に理念だけでなく、一步一步その実現に近づきつつあるといっていよう。

なお、本稿では取り上げなかったが、2年制のコミュニティ・カレッジも、大学とともに、むしろ大学以上に成人に対する拡張活動を行っており、その発展に多大な貢献を果たしている。それゆえ、コミュニティ・カレッジ

もまた「中等後教育」の「生涯学習」の実現の上で重要な役割を担うものである。これについては、今後の考察課題としたい。

〔注〕

- (1) アメリカでは、一般に「生涯教育」ではなく「生涯学習」という言葉が使用されているので、これに従うことにする。なお、わが国に関係する部分は、そのまま「生涯教育」を用いた。
- (2) 松本憲「生涯教育と高等教育開放の方向」, 日本生涯教育学会編『生涯教育の展開』(日本生涯教育学会年報 第1号), ぎょうせい, 昭55, p.108.
- (3) この「大学拡張活動」は、二年制カレッジにおいても盛んに行われているが、本稿では、以下、主に四年制大学を中心に取り上げる。したがって、本稿で使用する「大学」は、二年制カレッジを含まない。
- (4) 福尾武彦「第二次大戦後のアメリカ社会教育の発展と課題」, 梅根悟監修『社会教育史Ⅱ』(世界教育史体系 37), 講談社, 昭50, p.127.
- (5) Jack London, Robert Wenkert, Adult Education : Definition, Description, and Analysis, (David W. Swift ed., American Education : A Sociological View), Houghton Mifflin Company, 1976, p.256.
- (6) Ibid., p.257.
- (7) Philip Werdell, Futurism and the Reform of Higher Education, (Alvin Toffler ed., Learning For Tomorrow : The Role of the Future in Education), Random House, Inc., 1974, p.276.
- (8) Ibid., p.277. () は引用者。なお、第一の告発は、1950年代の大学教授によって書かれた、アメリカ高等教育に対する批判を内容とした書物を指している。
- (9) Jack London, Robert Wenkert, Op. Cit., p.259.
- (10) 飯島宗一「生涯教育と中等後教育」, 文部省大臣官房編『文部時報』第1246号, 昭56, p.71.
- (11) Jack London, Robert Wenkert, Op. Cit., p.260.
- (12) Ibid., p.260.
- (13) 次の文献を参照。Victor P. Meskill, Weekend College, (Dyckman W. Vermilye, Learner-Centered Reform), Jossey-Bass, 1975, pp.107—112.
- (14) Ibid., p.112.
- (15) それゆえ、大学生の高齢化も進み、例えば、全カリフォルニア州立大学に在学中の学生の41.5%は21歳を超えている。また21歳を超えて入学する者も、1966年

の1.6%から1972年には5.5%へと急増している。さらに大学院学生についても、37%は30歳を超えているという。

(16) K. Patricia Cross, *Serving the New Clientele for Postsecondary Education*, *Education Digest*, March, 1974, p.41.

(17) Julius Menacker, *From School to College: Articulation and Transfer*, American Council on Education, 1975, p.111.

(18) *Ibid.*, p.111.

(19) K. Patricia Cross and J. Quentin Jones, "Barriers to Traditional Education," *Explorations in Non-Traditional Study*, ed. S. B. Gould and K. P. Cross, McGraw-Hill Book Co., 1972, pp. 43—49. *Ibid.*, p.111.

(20) とくに、外部学位プログラムとして注目されるのは、New York regent's degree と Empire State College の学習請負い方式である。

(21) 全国的サンプル調査によれば、18歳から60歳までの成人が、12ヶ月にわたりパートタイムに基づいてフォーマルな学習をしているのは、全体の $\frac{1}{3}$ にも達しているという。K. Patricia Cross, *Op. Cit.*, p.40.